

# Species

## 目次

- p.2 小竹由美子さん オープンセミナー
- p.3 ウズィ・ヴァイルさん オープンセミナー
- p.4 英語サミット
- p.5 井野瀬ゼミ×ゼミ 合同セミナー
- p.6-7 留学経験学生に聞いてみた ㊦



## はじめに

甲南大学文学部英語英米文学科の皆様、今年もKEALL執行部が発行するSpeciesをお手に取ってくださりありがとうございます。今年は昨年同様にオープンセミナー、英語サミットを開催することができました。また昨年とは違い、ゲストスピーカーを実際にお招きすること、対面での英語サミット開催を行うことができ、またひとつコロナ以前の学生生活が戻ってきました。今年オープンセミナーで翻訳家の小竹さん、作家のウズィ・ヴァイルさん、英語サミットで大西さんに講演をしていただきました。このような講演会は偏に講演者様をはじめ、教職員の皆様のご協力によるものであり、深く感謝申し上げます。

2022年度に行われましたイベントをこの一冊にまとめましたので、ぜひじっくりお読みください。

# 小竹由美子さん オープンセミナー

2022年6月23日に秋元ゼミと「英米文化研究」「イギリス文学思潮史」の合同授業として、ノーベル文学賞作家アリス・マンローの翻訳でも知られる、翻訳家の小竹由美子さんをゲストにお招きし、オープンセミナーを開催しました。小竹由美子さんがどのように翻訳家の道を進まれたのか、翻訳家とはどんな仕事なのか、英語はどのように身につけたのかなどを進行役を務めていただいた秋元先生からのインタビュー形式でお聞きしました。

小竹さんは法学部を卒業したのち結婚して香川県に移住、そこから英語を勉強して翻訳家になられたという珍しい経歴を持たれています。翻訳家になられたきっかけは、翻訳本を読むことが子どもの頃から好きで、本を訳すことが一番の読みではないかと考えたからだそうです。お話を通して、本を読むことが好きという小竹さんの思いが伝わってきました。やりたいこと、好きなことを仕事にするのは難しいことですが、決して諦める必要はないのだなと思いました。人生設計を行う大学生のタイミングで小竹さんの貴重なお話を聞くことができよかったです。

その後は様々な質問を小竹さんに答えていただきました。「物語を翻訳する時の背景についてやその世界観のイメージについてどのように調べるのか？」という質問には「研究書を読んだり、インターネットで調べることが多い」と仰っていて、翻訳をするだけでなく調べ物にも手を出す必要があるので、相当時間をかけなければ1作品を完成させることができない道のりの陰しい仕事を続けてらっしゃるんだなと感じました。しかもそれをご結婚をしてお子様も生まれてからやってみようと試みたその行動力には感銘を受けました。

「本を読むというのと訳すというのはどういうバランスですか？」という質問には「仕事が詰まっている時は本を読みたいと感じます。日本のものはあまり読まないの、久しぶりに読むと作家さんの持ち味が活かされた自由な言葉が使われていてなんだかんだほっとします」とおっしゃっていました。確かに果てしない分量の英語の塊をひたすら調べ物をしながら日本語に翻訳するという作業をずっとしていると、久しぶりに読む自由な表現をしている日本語の本は心地よく感じるだろうなと思いました。異なる言語の文学作品を日本語に変えて、私たちが経験したことのないことを疑似体験しやすくしてくださっている翻訳家の方には頭が上がらないなと感じましたし、普段生活をしていて聞くことのできないお話をたくさん聞くことができるすごく貴重な機会となりました。小竹さん本当にありがとうございました。

この記事は秋元ゼミより西岡大晟さん、久保田和麿さんにご協力願いました。  
ありがとうございました！



## 小竹由美子さん略歴

1954年、東京都生まれ。  
早稲田大学法学部卒。英米文学翻訳者。  
訳書にアリス・マンロー『イラクサ』『ピアノ・レッスン』、  
ネイサン・イングラダー『アンネ・フランクについて語るときに僕たちが語ること』『地中のディナー』、  
カリ・ファルド・アンスタイン『サブリーナとコリーナ』、  
マギー・オルファーレル『ハムネット』など。

# ウズィ・ヴァイルさん オープンセミナー

2022年11月17日、ウズィ・ヴァイルさんによる講演では、『首相が撃たれた日に』の中の19個の物語からいくつか取り上げて、物語のあらすじや、執筆の経緯などが話されました。取り上げられたどの物語も面白そうだったのですが、特に『もう一つのラブストーリー』と『嘆きの壁を移した男』が印象に残りました。「イスラエル人のメンタリティに潜む矛盾を取り上げて、ぶつけ合わせたらどうなるか。」ということにこの2つの風刺的な物語の着想を得たそうです。世の中の矛盾する事柄を取上げてぶつけて、追究するというウズィさんのこの現実的な姿勢は、大学生である私にも学ぶものがあると感じました。また、別の物語『良識の限界』では、人工言語であるヘブライ語の言葉遊びがふんだんに使われており、「翻訳不可能な作品」「日本人の方がどのような感想を持つのか是非伺いたい。」とウズィさんが仰っていたのがとても印象的で、ヘブライ語の言葉遊びがどのように日本語に翻訳されているのかが非常に気になるところです。この講演は、『首相が撃たれた日に』に対するウズィ・ヴァイルさんの思いを直接知ることができる非常に貴重な経験となりました。

ウズィ・ヴァイルさんの講演後は、本の中から「で、あんたは死ね」、「もう一つのラブストーリー」をウズィさんにヘブライ語で、大谷さんに日本語で朗読していただきました。ヘブライ語を聞いたのは初めてで、聞き始めはこんな言語なんだなと思うところから、日本語や英語とは全く違う言語を生で聞き、世界の広さを感じました。そして日本語朗読では、プロである大谷さんが一言一言に気持ちを込めて朗読してくださり、ウズィさんの描いた物語の中に参加者を連れて行ってくれました。同じ物語でも言語によって雰囲気が変わり、2度楽しむことができました。翻訳という技を使い、こうして言語の垣根を越えて物語を楽しむことができることを今回の朗読を通して直に感じることができました。

そして最後には、ウズィさんに質問に答えていただきました。食べた日本食でおいしかったものは何かという素朴な疑問から、ヘブライ語やイスラエルに関する質問まですべての質問に答えていただきました。中でも「分断が起こる社会で文学が果たす役割、AIが進む中で文学で果たす役割はどのようなものだと思いますか。」という質問に対して、「かつては文化的に大切なものであったと思う。しかし、私にとっては今日の人たちにとって最良のものを書くことが大切である。そして、AIは人間のレプリカにすぎず、楽しませることはできるがAI自体が苦しむ、悲しむことはできない。そこが決定的に違うと思う。」とお話しくれました。文学を学ぶ英文科学生にとって文学そのものを考える質問とウズィさんのお答えを聴くことができました。

ウズィ・ヴァイルさん、大谷さん ありがとうございます。



## ウズィ・ヴァイルさんプロフィール

1964年、ホロコースト第2世としてキブツに生まれ、1歳でテルアビツに移り、現在も在住。作家でコラムニスト、脚本家でジャーナリスト、マーク・ストランドやレイモンド・カーヴァーの詩集のヘブライ語訳者でもある。

## 大谷賢治郎さんプロフィール

演出家。1972年東京都出身。サンフランシスコ州立大学芸術学部演劇学科卒。Company ma主宰。現在、桐朋学園芸術短期大学特任准教授、東京藝術大学非常勤講師、東京都芸術総合高等学校特別専門講師。



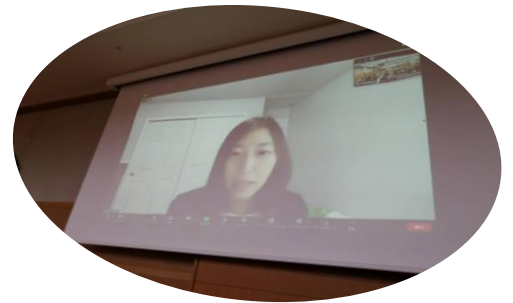


# 英語サミット

2022年12月7日、英語サミットは3年ぶりとなる対面での開催で、会場となった813教室には英語英米文学科の1、2年生が集まり、ゲストスピーカーである甲南大学文学部英語英米文学科の卒業生(2006年卒業)で、今現在アメリカのコロラド州にあるコロラド・カレッジで教鞭をとられている大西さんをお招きした講演会、そしてKEALL主催のイベントを行いました。

講演会では大西さんにアメリカのご自宅からzoomを繋げてお話をいただきました。大西さんは中学校の頃から英語という科目に興味を持ち、大学進学の際に、この文学部英語英米文学科を選択されました。そして英文科で学びを進めていく中で、中谷先生の英語学の講義の内容に関してとても興味を持たれたそうです。就職活動では内定をもらっていたものの、中途半端な気持ちを持ったまま就職することに迷いがあり、言語学についてより学びたいとの思いからアメリカ、アリゾナ大学の大学院に進学しました。このときに日本の大学院ではなく、アメリカの大学院を選択された理由として、アリゾナ大学の日本語クラスでアシスタントとして教えることで授業料が免除され給与が発生する制度があったからだそうです。2013年に第二言語習得理論において言語学の博士号を取得されると、アイオワ州のグリネル大学で2年間教壇に立ち、その後、現在のコロラド・カレッジに移られたそうです。コロラド・カレッジでは、日本語のクラスと社会言語学のクラスを担当し、また学会などでの論文の発表などもされているそうです。

ここで質疑応答の時間が設けられ、進路選択に関することやアメリカでの生活のことなど様々なことについてお答えいただきました。その中から1つ紹介すると、「将来の道を決めることに不安になったことは？」という質問に対して、「修士課程を終え、博士課程に進むときにとても不安になりましたが相談した教授が行きなさいということを書いてくれたことで不安を解消することができた。」とのことでした。



講演後のKEALL執行部主催のゲーム大会では、今年初めて行った伝言ゲームとことわざ問題、昨年同様の音声記号問題が行われました。伝言ゲームでは間違った伝言が後々修正されたり、ことわざ問題では知識が試されたり、音声記号問題では音声記号を読むことが難しかったりとあり、各クラスの協力が見られました。

結果は…

1位:大谷先生クラス 2位:福島先生クラス、秋元先生クラス 3位:中谷先生クラス でした。  
入賞クラスのみなさん、おめでとうございます！



# 井野瀬ゼミ×永廣ゼミ（経済学部） 合同セミナー

2022年12月14日、経済学部永廣ゼミと文学部井野瀬ゼミでの合同セミナーでは、各ゼミ2つのテーマを準備し、互いの報告について様々な視点から問題について考え、意見交換や指摘をし合いました。

それぞれのテーマに共通した点は、今現在世界中で実際に起こっている事件や、近い将来の自分たちの生活に関して考えるべき問題や課題点などに特に目を向けた内容であったという事でした。

テーマは、「香港の学生問題」、「結婚を巡る愛と金の問題」、「eスポーツの今後の可能性」、「コロナ禍での映画の興行収入について」の四つのテーマでした。経済学部はグラフやチャートを用いて、お金の面を考慮した経済学的視点から考察していたのに対し、文学部はエビデンスを重視した文学的視点で考察し、両ゼミで全く異なった意見が飛び出しました。それぞれが全く違った意見をぶつけ合う事で、皆が一一つ一つのテーマにより一層向き合い、議論が大いに盛り上がりました。

今回のセミナーで感じた点は、研究テーマの全く違う者同士が意見交換を積極的に行う事で、それまでは見えてこなかった別の側面からの新たな考え方を見つけることができ、周りの意見やアドバイスを取り入れていく事で、自分自身の今後の卒論報告や社会に出た時のディスカッションのスキルの向上などの面で更なる磨きをかける為の良い機会になったということです。

今回のセミナーの中で1番刺さった言葉があります。それは、井野瀬教授の「聞き手から意見の出ないような報告はするな」という言葉です。「報告に関して意見が出るということは素晴らしい事であり、周りに興味を惹きつけている証拠である。」という言葉で、今後の様々な報告や卒論報告の中で心がけるべき大切な点であると改めて実感しました。



# 留学経験学生に聞いてみた

海外留学が再開し、学内にもたくさんの留学生をみかけるようになりました。今回は、今年度海外へ留学した3名の英文科学生にインタビューを敢行しました！

質問1、留学先はどこですか？また、選んだ理由は何ですか？

質問2、留学先で困ったことは何ですか？

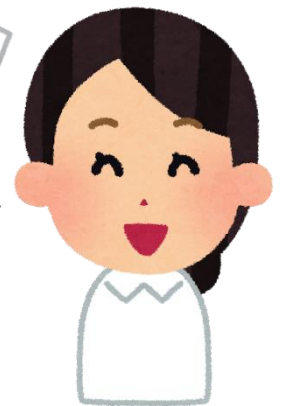
質問3、甲南大学と一番違うところや印象に残ったことは何ですか？



鷺尾 悠月さん(3回生)



- 1, カナダ、オタワ カールトン大学  
比較的日本人が少ないところなのと、雪が大好きなので寒く冬は必ず雪が降るところで決めました。
- 2, バスが時間通りに来る来ない以前に一本丸々飛ばされたり、待ってるのにスルーされたりするのが一番困りました。
- 3, キャンパスが広い、建物がモダン、キャンパス内を自転車やスケートボードで移動している人をよくみたりするのがとても印象的です。どんだけ大講義でも現地の人たちは発言しているのはとても感動しました。



若竹 葉奈さん(3回生)

1, 韓国、釜山市 東義大学。

英語ばかりやってきて新しい事をしたいと思い、その中でも私は小学生の頃からK-pop好きなので、自分の中で1番身近であった韓国語をもっと学びたいと思ったから。

2, 他の国に比べると日本と似ている部分が多く、特別困ったことはなかったが、料理が辛かったり好き嫌が多い私には食べられないものが多かったりした。言語面で分からないことがあっても嫌がらずに教えてくれたり助けてくれたりする人が多く困ることは無かった。

3, 授業が普通の大学の授業とは別に語学堂と言った外国人だけが集められた韓国語の授業が毎日あり、レベル別に6クラスに分けられて自分に合ったレベルの授業を受けられた。私は全然韓国語力がないまま行って授業についていけないか不安があったが、自分のレベルにあった授業を受けられたから韓国語がしっかり身についた感じがしてよかった。



森下 紗彩さん(3回生)

1, イギリス、ウェスト・ヨークシャー州 リーズ大学  
選んだ理由は、連合王国であるイギリスに留学をして、場所によって全く異なる文化を肌で感じてみたかったからです。実際に、近代的な都市や古い建築物のある街並み、田舎風景を楽しめる村など様々な場所を訪れることができ、それぞれに魅力が沢山詰まっています。

2, イギリス英語になかなか慣れることができず苦労しました。今までアメリカ英語を学んできたため、アクセントやものを指す単語自体が異なっていることもあり簡単な英単語でさえ聞き取れない時もありました。ホームステイと寮生活を半期間ずつ体験できる留学プログラムに参加していましたが、留学間もない頃はイギリス英語+訛りのあるホストファミリーとコミュニケーションを取ることが特に大変でした。

3, 様々な国籍の人が沢山いることです。もちろん甲南大学も各国の留学生の受け入れをしていますが、短期・長期留学だけでなく正規学生として在籍している学生も大勢いる印象でした。また、国際交流イベントにも参加しましたが、他の留学プログラムに参加している学生だけでなく他大学の学生もイベントに参加していました。様々な国籍や大学の留学生で溢れかえていた中で交流は、本当に楽しかったです。

皆さん、いかがでしたでしょうか？

インタビューをしてみて、三者三様の文化の違いや言語の違いでの苦労がみられました。しかし、それ以上に日本では触れることができない大学の雰囲気、その土地の様子、現地学生や同じ留学生との交流ができたといった経験を伺うことができました！

この他にも留学先はたくさんあるので、留学を考えている、海外に興味がある英文科学生のみなさんの参考になれば嬉しいです！

インタビューに答えてくれた鷲尾さん、若竹さん、森下さん、ありがとうございました！

甲南大学では学内留学という形で、Global ZoneでLOFTアクティビティーを開催しています。

Assistant学生以外にも留学生Tutorもたくさんいます！  
ぜひ足を運んでみてください！

**Welcome !**



# さいごに

## KEALLとは…

Konan association of the department English and American Literature and Language  
英語英米文学科の略称です。英文科に所属する皆さんはKEALLのメンバーです！

## KEALL執行部とは…

英語英米文学科の1回生から4回生までみんなが交流出来る場を作る  
また学科イベント(オープンキャンパスやゲストを招いてのサミット)や新入生歓迎会や卒業パーティーの開催など、年間を通して様々な活動を行っています。

今年度から参加しましたが楽しく活動出来ました！皆さんもぜひ入ってください！

2回生 鶴 明憲

ウズィ・ヴァイルさんの「首相が撃たれた日に」は甲南大学図書館でも早速貸し出しが始まりました。是非読んでみてください！！

2回生 富嶋 成之介

今回私にとって初めての対面での英語サミットということで、準備や当日大変なことも多かったですが、無事に終わってよかったです。

2回生 新見 和大

毎週火曜日、お昼ご飯を食べながら楽しくミーティングを行っています。とてもアットホームな場所なので、見学だけでも来てみてください！

3回生 武市 奈千

これから少しずつイベントを対面で実施できるようにする予定です。今までよりももっと楽しいKEALL執行部の活動になると思うので、ぜひ見学に来てみてください！

3回生 橋本 怜奈

遂に対面で英語サミットを開催することができました。昨年度のzoom開催とは異なり、ゲームで盛り上がる会場の熱意を実際に肌で感じる事ができKEALLメンバーとしてこのサミットに関われたことをとても嬉しく思います。来年度のサミットが待ちきれません！

3回生 大東 怜花

僕たちと一緒に英文科を楽しく盛り上げましょう！！

3回生 中山 雄翔

KEALL 執行部には心優しい方がたくさんいます。ぜひ、皆さんもKEALLと一緒に運営しませんか？

3回生 長谷中 梓

毎週和気あいあいと企画を考えています！楽しいメンバーばかりなので、ぜひ1度来てみてください(^^♪

3回生 兵頭 あかり



Let's check KEALL's Instagram!!



@konankeall

毎週火曜日 12:20~  
10号館8階  
英文研究室にて  
ミーティング中